

【宗祖法然上人御法語】

(第四) 出世本願しゅつせほんがん

1

念仏往生の誓願せいがんは、平等の慈悲に住して発おこし給いたる事なれば、人を嫌うことは候そうら わぬなり。

念仏往生の誓願せいがんは、平等の慈悲に立つて起こされたものですから、人を分け隔てすることはありません。

2

仏の御心みこころは、慈悲をもて体たいとする事にて候そうらう うなり。

仏の御心みこころは慈悲そのものであります。

3

されば観無量寿経かんむりようじゆきようには、「仏心みこころというは、大慈悲これなり」と説かれて候そうらう う。

だからこそ『観無量寿経かんむりようじゆきよう』には、「仏の心とは、大慈悲に他ならない」と説かれているのです。

4

善導ぜんどう和尚かしょう、この文もんを受けて、「この平等の慈悲をもては、普あまねく一切を撰せんず」と釈し給えり。

善導ぜんどう和尚かしょうはこの一文を受けて、「阿弥陀仏はこの平等の慈悲によつて、あまねく一切しゆじょうの衆生しゆじょうを救い取る」と解釈しておられます。

5

「一切」の言ごん、広くして、漏るる人そうろ候うべからず。

「一切」という言葉の意味は広いので、漏れ落ちる人のいるはずはありません。

6

されば念仏往生の願は、これ弥陀如来の本地ほんじの誓願せいがんなり。

ですから念仏往生の願は、阿弥陀仏が菩薩であった時の願なのです。

7

余しのの種々しゆじゆの行ぎようは、本地ほんじの誓せいいにあらず。

念仏以外の様々な修行は、その時の誓いではありません。

釈迦も世に出で給う事は、弥陀の本願を説かんと思おぼし食みす御みこころ心こころにて候そうらえども、衆しゅじょう生の機縁ぎ縁に随したがい給う日は、余の種しゅじゅ々の行ぎょうをも説き給うは、これ隨機の法なり。

釈尊が、この世にお出ましになったのも、阿弥陀仏の本願を解こうとお考えになった御みこころ心こころからであります、衆しゅじょう生の能力や状況に合わせられた折には、念仏以外の様々な修行をもお説きになられました。これは(あくまでも)聞き手に応じて説かれた教えであります。

仏の自らの御みこころ心こころの底には候そうらわず。

釈尊ご自身の御みこころ心こころの奥底から出たものではありません。

されば念仏は弥陀にも利りし生の本願、釈迦にも出世の本懐ほんがいなり。

ですからお念仏は、阿弥陀仏にとっても衆しゅじょう生しょうを救うための本願であり、釈尊にとっても世にお出ましになった本意であります。

余の種々の行しゅじゅぎようには似そうろ候うなり。

その他の様々な修行とは異なるものです。